

## あとがき

古くから人間にとって不可欠な生活要素を東洋では「衣食」と言い表してきた。それは着たり食べたりすることから転じて、生活することの同義として用いられてもいる。「衣食足れば即ち榮辱を知る」というのは、中国の古典『管子』にある箴言である。生命を保つために必要な「食」よりも「衣」が先に挙げられているのは、食は動物全体に普遍的な必要事であるのに対し、衣は人間社会固有の文化であることをある程度反映しているのではなからうか。

東洋ばかりではない。かつて「裸族」と呼ばれたニューギニア高地人たちが、成長段階に伴って無垢の赤子の全裸から局部を覆う装身文化を身につける社会的存在になっていく様子が、本書の塩田執筆の章で語られている。これはまさしく旧約聖書のアダムとイブの姿のアナロジーであるといえよう。「着ること」は、知恵の木の実を食べた人間のみの文化なのである。

世界の衣服文化の現状や歴史についての専門家やその著作は数多い。しかし、本書では、あえてその分野では非専門家である個々の途上国研究者が筆を染めている。しかも、衣服のなかでも、日常着——すなわち、仕事着・普段着の世界を取り上げ、いわゆる晴れ着や民族衣装（現代ではその多くが晴れ着の一種となっている）は、対象としていない。共編者・宮治一雄からの各執筆者

への呼びかけは、「はしがき」にみるように、衣服と環境というテーマを土台に据えてのものであった。そのことに、あくまでも第三世界の人々の日常生活の諸相に社会科学研究者の眼をもって正対しようとするこの「くらし」シリーズの意図を感じ取っていただければ幸いである。

なおこの書は、さきに『アジ研ニュース』第百三十号（一九九二年一・二月合併号）の「第三世界の日常着」特集に参加した二十一編にそれぞれの執筆者が加筆改稿のうえ、新たに書き下ろされた十三編が合流して成立した。新規執筆分は次のとおりである。台湾・佐藤幸人、タイ・末廣、マレーシア・鳥居、インドネシア・佐藤百合、ミャンマー・高橋、バングラデシュ・村山、スリランカ・中村、イラン・鈴木、トルコ・長場、イエメン・佐藤寛、ジンバブエ・平野、パプアニューギニア・塩田、補章（日本）・大岩川。

はかり（度量衡）・こよみ（暦）・すまい（住居問題）・のりもの（交通機関）・たべものや（外食産業）に次いで本書が六冊目となったこの第三世界の「くらし」シリーズは、これまでその慎ましい発行部数にもかかわらず、思いがけない愛読者からのご好評をお寄せいただくこともしばしばであった。おわりに、そのご声援と、アジア経済出版会および研究所広報部編集第一課で本書の製作に携わった担当者の方々に、執筆者一同とともに心から感謝したいと思う。

一九九三年一月

大岩川 嫩

「くらし」シリーズ既刊案内

〈B 6 変型判〉

70 「はかり」と「くらし」 第三世界の度量衡  
小島麗逸 / 大岩川嫩編 ●日本図書館協会選定図書

発展途上国のくらしに根ざした度量衡の多様な実態を、三十数名の地域研究者が体験的に論じ、解明する。第三世界の地域理解に必須の手引である。写真・図版多数。一九八六年刊

73 「こよみ」と「くらし」 第三世界の労働リズム  
小島麗逸 / 大岩川嫩編 ●日本図書館協会選定図書

三十数途上国の生産と生活のリズムを、地域研究者の眼で風土に根ざした多様な「暦」の世界に探る。巧まざる文明批評。写真・図版多数。一九八七年刊

78 「すまい」と「くらし」 第三世界の住居問題  
堀井健三 / 大岩川嫩編

伝統的な途上国の庶民の住居は、近代化の波に洗われて変貌しつつある。都市のスラムに農村の集落に、その多様な実態を国別に浮き彫りにする。一九八九年刊

80 「のりもの」と「くらし」 第三世界の交通機関  
吉田昌夫 / 大岩川嫩編

ベチャから飛行機まで――途上国の人々の暮らしの足として、経済活動の動脈として活躍する多様な交通機関のあり方を興味豊かに解説する35編。一九九〇年刊

85 「たべものや」と「くらし」 第三世界の外食産業  
岩崎輝行 / 大岩川嫩編

民衆のエネルギーの源泉である食の世界を、「外食」のありようから楽しくそして鋭く描き出す四〇編。途上国理解にも旅行者のハンドブックにもすぐれて有用。一九九二年刊

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後、古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにあり、これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々發展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考へる場合、在米流行の理解による、パターンを以てするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があつて、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考へられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。——この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かつて、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七カ年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月

アジア経済研究所 東 畑 精 一